

PICK UP!

ニュースレターは、ホームページでもご覧いただけます。
URL <http://genderkyoten-ku.jp>

事業の取組紹介

女性研究者がライフイベント(出産・育児・介護)と研究を両立させるための環境整備に取組んでいます。



REPORT

研究と育児の両立を大学が後押し！

熊本大学医学部附属病院神経精神科 小山 明日香 さん



昨年度、研究補助者雇用支援事業と共同研究支援事業等のお世話になりました。私には3人の子供がおりますが、熊大には女性研究者の出産・育児・介護等と研究の両立を支援する様々な事業や制度があるので、とても助かっています。思うように研究の時間が確保できなかったりして大変だということもありますが、「研究と育児の両立を大学が後押ししてくれている」と思うと、なんとか頑張ろうという気持ちになります。また、研究室の上司の理解と男女共同参画の関係者の方々からの励ましにも感謝しています。

女性研究者支援ワーキンググループ (WG)

熊本県内 11 大学の代表 17人からなる WG で拠点型事業の企画・実施を担っています。これまでに会議を6回開き、前ページの「ジェンダー入門」や女性研究者交流会開催の他、シンポジウムのテーマ・講師選定や大学コンソーシアム熊本加盟機関へ発信する「提言」をまとめる等、積極的な活動を展開しています。



予告 共同研究支援事業報告会

【時 間】平成27年12月8日(火曜日) 午後1時～
【場 所】熊本大学「くすの木会館」

「女性研究者研究活動支援事業(拠点型)」では、平成25年度より大学コンソーシアム熊本加盟機関の女性研究者間の共同研究スタートアップ支援を行ってきました。これらの支援を受けた方による研究報告会を開催します。12の研究について発表があり、熊大研究担当理事が講評します。女性研究者同士の交流と連携・研究力の向上が期待できる報告会へ是非ご参加ください。

女性研究者研究活動支援事業(拠点型)を取組んで

平成 25 年秋から文部科学省の本事業を実施し 2 年余り。これまでの熊本大学の取組(研究補助者雇用事業、病児保育・託児事業、男女共同参画推進フォーラム、女子中高生の啓発事業、ジェンダー科目の開講、保育園の運営など)に加え、新たにライフイベントからの復帰支援(本学対象)、県内所属の女性研究者間の共同研究支援(代表者は本学女性研究者)、県内全大学を対象に介護なんでも相談室や病児・病後児保育事業、女性研究者交流会、夏季集中講義、意識改革のためのシンポジウム等を大学コンソーシアム熊本と連携して取組んできました。おかげで、広範な対象者に利用・参加いただき、大変喜ばれております。本事業の推進で、益々の多様な人材の活躍を願っています。



熊本大学 副学長(男女共同参画担当)／男女共同参画推進室長 山縣 ゆり子

熊本大学は「共に生きる環境づくり」に積極的に取組んでいます。

熊本大学は、平成18年度から全学的な男女共同参画推進を図っています。この目的を達成するため、本学は、全職員、学生等の意識改革に努め、平成19年3月26日に策定した「熊本大学男女共同参画推進基本計画」(期間 10 年)の実現に向け具体的な取組みを推進しています。



編集・発行

熊本大学 男女共同参画推進室

TEL/FAX 096-342-3281

「女性研究者研究活動支援事業(拠点型)」事務局

TEL/FAX 096-342-3976

e-mail: kyoten@kumamoto-u.ac.jp



Choice is ours in every moment.



文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(拠点型)」

News Letter

秋号
2015.10

ご挨拶

熊本大学長 原田 信志

我が国において女性の活躍を阻害している主な要因は、これまで男性中心の社会・労働慣行があったためと言われています。また人口減少に伴う日本の社会の活性化には、人口の半分を占める女性の能力を最大限に生かす必要があります。熊本大学ではこれまで、「女性研究者支援モデル育成事業」や「女性研究者養成システム改革加速事業」の採択を受け、平成25年度からは「女性研究者研究活動支援事業(拠点型)」の実施で、様々な取組を行い、実績をあげて参りました。しかしながら、女性教員の比率は16%程度であり決して高いものではありません。また指導的地位にある女性の占める割合なども、これからは30%程度となるよう期待されています。ただ単にこのような数値目標を達成することだけが重要ではなく、もっと根本的問題が解決されないときちんとした女性の活躍は期待できないでしょう。それは、「仕事と生活の調和を図り男女共に協力して充実した社会や家庭を築く」という意識改革だと思っています。そうでない個性と能力を十分に発揮し、多様性に富んだ創造的社會を作ることとはできないと思います。今後、この点も含んだ上で頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。



夏季集中講義「ジェンダー入門」を開催しました



女子学生のキャリア意識の形成に関わる取組のひとつとして、熊本県内全ての大学生と大学院生を対象に8月26日から3日間にわたり開講しました。ジェンダーバイアスや、日常的に触れるメディアで刷り込まれるジェンダー意識など、ワークショップ形式で意見交換を行いながら学び、これからの生き方について考える機会となる講義となりました。

詳細は中面へ

女性研究者交流会

場所：熊本大学薬学部大江キャンパス内「宮本記念館」

全国的に活躍するリーダー的立場にある女性研究者を講師に迎え、大学コンソーシアム熊本加盟機関の女子学生・院生・若手研究者との「女性研究者交流会」を開催しています。今年は、交通の便が良い熊本大学大江キャンパス内「宮本記念館」で2回、いずれも「リケジョ」の先達が講師で、興味深いエピソードを交えた講話に続いて参加者と質疑応答、活発な意見交換が行われました。



第2回 平成27年3月5日

講師：金沢大学 理工研究域 環境デザイン学系 池本良子教授
(学長補佐・男女共同参画キャリアデザインラボトリー長兼任)

「キャリアデザイン～私の場合～」のテーマで、結婚子育てを経て、現在のキャリアに至ったお話と金沢大学での拠点型の取組みを伺った後、熱心に質疑応答が行なわれた。

アンケートより

- ・いろいろな立場の方から様々な視点の話が聞けてとても有意義だった。
- ・リラックスした雰囲気情報交換できてよかった。
- ・研究の道に進むか悩んでいたが、話が聞けて良かった。今後もこのような機会があれば是非参加したい。
- ・育児中の男性研究者やその上司にも参加してほしい。
- ・子育て経験のある先輩研究者のリアルな意見を聴けて励まされた。

第3回 平成27年7月17日

講師：熊本大学発生病学研究所 齊藤典子准教授



アンケートより

- 「再発乳がん」の仕組みを解明する等、細胞医学分野で活躍中の齊藤氏が「普通女子、アメリカ大学院で博士をとる」のテーマで、現在のキャリアに至るまでを、本学の男女共同参画推進事業が後押ししてくれたことも含めて、興味深いエピソードを交えて講演後、活発な意見交換が行われた。
- ・実際に活躍されている研究者の話を生で聞くことができ、大変貴重な経験になった。
- ・Ph.D をとった様々な人の意見が聞けて良かった。
- ・このような機会を通して若いうちからキャリアを考えられるというのは素晴らしいことだと思う。
- ・ボス世代の意識改革、男性の指導者に対する教育にも力を入れてほしい。

夏季集中講義「ジェンダー入門」3日間開催

河村 洋子 准教授 熊本大学政策創造研究教育センター

8月26日

「ジェンダーと健康の関係」 ～改めて考えてみよう「ジェンダー」とは？～

「男女の違いを感じたことがあるか？それはどんな時か？」「男女ではどちらが健康か？その理由は？」等の質問に対して、参加者がペアとなって意見交換するところから始まった講義は、普段意識することのない問題点を考えるきっかけ



となり、学生の関心を高めていた。アフリカのある地域で女性の死亡率が高い理由として、妊娠出産に伴う死や女性器切除等の慣習、男児至上主義といった社会的・構造的な性差別などがあり、健康とジェンダーも深く関わっている例をデータと共に示された。比較的格差が少ない日本においても、近年所得格差が広がり、価値観が多様化することにより、核家族の中で互いに支え合うことが難しく、個人の力だけで生きていくことを余儀なくされる社会になりつつある。性的少数弱者の人も含め全ての人が健康に、さらには幸福に生きるために、「ジェンダー」問題が社会の中で大きな部分を占めていることに気が付いてほしいと締めくくられた。

鈴木 桂樹 教授 熊本大学法学部

8月26日

「今、なぜ、 どんな男女共同参画社会なのか？」

「日本で男女共同参画を担当している機関はどこか？」の問いかけから、女性の活躍促進に力を入れている理由の一つではなく、その時代の社会経済情勢の変化や政府の政策も大きく影響しているという指摘から講義が始まった。今や、男女平等は当然のこととして捉えられつつあるが「どんな社会をめざしているか？」を考えると、仕事第一で長時間労働を強いられる男性優位社会に追いつく方法ではなく、「人々の可能性を高める為に、選択肢を増やし、男性の生き方・働き方も見直す必要がある」と指摘。少子高齢社会となった日本における労働力問題・老後の生活・個人の生きがい等を考えると、各人のおかれている環境に、一定の配慮・支援を



することで、多様な生き方を可能にする社会を実現すること、さらに仕事と生活を調和させた生き方こそ、今求められているのではないかと進むべき男女共同参画社会について考えるきっかけとなる話を展開された。

瀬口 典子 准教授 九州大学大学院比較社会文化研究院

8月26日

「自然人類学からみた性差・ジェンダー・ セクシュアリティ」

～生物学的性差とジェンダー：ステレオタイプが強調される理由～

性差を強調して描いたディズニー映画の場面を示し、幼い頃から固定したジェンダー概念を刷り込まれていることを指摘した上で「生物学的な性は二つとは言えない。」と問題提起。博物館の人類進化展示で「男は外で狩猟、女は穴倉に残って子育て」に代表されるジェンダースtereotypeが見られる例や女性の人類学者が出てきたことで、バイアスのない、データに基づく分析によって先史時代の女性像（新しい技術の発明者であり、社会における革新者）が明らかになった経緯が紹介され、過去において、人類進化史が偏見の上に構築されてきた状況が示された。現代でも、保守派が性差強調のために用いる知的能力とは無関係な「脳の大きさ」や、科学的根拠のない「話を聞かない男、地図が読めない女」等、私たちが感



わされがちである事例を示しつつ、科学研究の内容と方法がジェンダーバイアスによる影響を受けることを知る必要があり、科学者は社会的、政治的な内容や影響も考慮し注意を払うべきであると強調された。

花野 泰子 氏 宮崎公立大学非常勤講師
元テレビマンユニオンプロデューサー

8月28日

「メディアが作るジェンダー、 メディアの中のジェンダー」

「女は短大に行って嫁に行け」と父親に言われ、兄と違って家業を継ぐことを期待されていなかったことが、ずっと後になって「ジェンダーの問題」であることに気付いたエピソードや、番組制作会社で働き、メディアが送り出す情報が人為的に構成された偏ったイメージであると感じ、大学院で学ぶ道を選んだ経験談の後、TVアニメの「サザエさん」を視聴、家父長制や性別役割分業、ステレオタイプ、ジェンダー規範の4つのキーワードを基に討論し、気づきを発表した。世の中の動きを把握するためには、オールドメディア（新聞・TV等）だけでなく、ソーシャルメディアからも情報を取り入れる必要があり、その際、メディアリテラシーを持つことは重要である。メディアの意思決定の場に女性が少ない現状だが、想像する力とジェンダーの視点から見る目を養ってほしいと締めくくられた。



女性研究者研究活動支援事業（拠点型）

News Letter

熊本大学
Kumamoto University

荻原 なつ子 教授 立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科教授・日本NPOセンター副代表理事

8月27日

「熊本版なつ子流白熱教室」

1 限目

「男女共同参画という考え方 ～社会に出て働くことについて」

女子学生が企業を受験することすらできなかった時代に何とか仕事に就き、「自ら仕事を作り出し」ながら、結婚・出産・育児を経て現在に至る経験談を交え、「赤ちゃん連れの学生が大学にいたらどう思うか？」等、学生とのやり取りを通して考える講義が展開された。男女共同参画はユニバーサルデザイン、つまり誰にとっても生きやすい社会ということ。日本国憲法に男女平等を取り入れることに貢献した米人女性ベアテ・シロタ・ゴードンさんを紹介し、女性が権利を獲得した歴史を知ること、重要性を再認識してほしいと強調された。



2 限目

「あなたが男である根拠、女である根拠は何？」

「あなたの性別を決めたのは誰？」という質問から始まり「体の違い」といった意見を受け、性別は出生時に本人の選択・努力とは関係ないところで決まるが、性別により差別が生じることが問題で、特に労働場における差別解消のため「男女雇用機会均等法」ができた背景やジェンダー格差を生む構造について解説。男女が共に社会的に自立し、「仕事観」を持つことが大切で、リスク分散の観点から「パラレルキャリア」がお勧めと締めくくられた。

3 限目

「どんな仕事をやりたいか？どのように生きていきたいか？」

ワールドカフェ方式（自由に会話し、ネットワークを築けるカフェのようなリラックスした空間でこそ創発されるという考えに基づいた話し合いの手法）で、会場いっしょに展開した4人グループが、萩原先生の見事なアイスブレイクで和気あいあいとした雰囲気の中、将来実現したい職業に向けて、相互に意見交換し、具体的な計画作りに熱心に取り組んだ。これからの社会は「連携と協働」がキーワード、つまりネットワークとノットワーキング（結んでいく）を大事にしてほしいと結ばれた。



八幡(谷口) 彩子 教授 熊本大学教育学部

8月28日

「男女共同参画の推進と ワーク・ライフ・バランス」



年齢階級別労働力率の「M字カーブ」は、女性のライフイベントのために生じると言われているが、もう一つのファクターとして「環境」があり、女性が働き続けられる社会基盤が整えば解消されることが国際比較で歴然としている。一方、女性の

ライフコースに関する考え方は時代によって変化しており、女性自身の理想と現実、また男性が期待する生き方とのギャップもある現状を豊富なデータを提示して解説された。少子化解消の為「女性性は家庭に帰れ」では問題は解決せず、「働きながら産みたい」に応え、両性ともに「仕事も家庭生活も両方大切に」する社会の実現が求められている。すなわち、男女共同参画推進事業は「環境整備事業」である。各自が「ワーク・ライフ・バランス」（仕事と生活の調和）を考えて問題解決のプロジェクトの担い手になっていってほしいと、学生への期待を込めた言葉で結ばれた。

西 英子 准教授 熊本県立大学環境共生学部

8月28日

「これからの生き方・働き方を考える」 ～全講義を振り返って～

都市計画の視点で日本を見ると、個人が自由を手に入れた半面孤立した状況に陥り、共生の良さを持つムラ型コミュニティが失われつつある。自分が自分らしく心地よくいるために何が必要か？ゴールとなるビジョンと現実とのギャップを埋めないと、絵に描いたモチで終わってしまう。家族皆の笑顔を守るためには、男女共に自立することが大事。大黒柱がいる「昭和結婚」ではなく、夫婦共働きの「男女共同参画型結婚」がリスクを回避し、それぞれが自分らしく生きて、助け合う社会に繋がるはずだと話された。

最後に全講義を受けた感想として「男が外、女は家と考えていたが、自分（女）も経済的に自立を考えようと思った」「講義を受けて様々な生き方があることを知り、工夫次第で自分らしく夢を叶え



る生き方ができるという希望が見えてきた」「女らしさのステレオタイプに当てはめようとしがちなので、自分は自分として生きていけたらと思った」などの意見が発表された。

参加後のアンケートより 熊本学園大学・尚網大学・九州ルーテル学院大学・熊本県立大学・熊本大学 から参加がありました。

- ・ジェンダーという概念を初めて知り、それに向き合うことで自分の女性としての生き方を見つめ直すきっかけになった。
- ・性差に関して、科学的にはまだ疑問の余地があること、男女平等にも経済的な思惑があること等、認識を改めさせられた。
- ・幼い頃から、ステレオタイプな考え方を刷り込まれていたのだと改めて感じた。

- ・ジェンダー科目を必修にして、男子学生にももっと参加してほしい。
- ・今回の講義では、普段考えないようなことを考えることができ参加して本当に良かった。
- ・これからの自分にプラスの結果をもたらす講義で、若い今、将来の自分を考える良い機会になった。講義で学んだことを忘れず、活かしながら生きていこうと思う。

